

執筆者紹介（執筆順）

宮坂 渉（みやさか わたる）

筑波大学人文社会系准教授。専門は、古代ローマ法。

担当：第1部第1講・第2講・第3講・第4講・第5講

業績：『カエサル 上・下』（訳書、白水社、2012年）、「1世紀プテオリおよびネアポリス近郊の帳簿と法（Tabulae Pompeianae Sulpiciorum 60-65）」（ローマ法雑誌2号、2021年）、『熟議民主主義×科学技術×法学の共振と相互連関：新研究領域のニーズ』（分担執筆、筑波法政学会、2022年）、『キーコンセプト法学史：ローマ法・学識法から西洋法制史を拓く』（共編著、ミネルヴァ書房、2024年）など。

松本 和洋（まつもと かずひろ）

関西学院大学法学部准教授。専門は、中世イングランド法制史。

担当：第2部第6講・第7講・第8講・第9講・第10講

業績：「ウィリアム・オブ・ドロエダと『黄金汎論』：法格言 *scienti et volenti non fit iniuria* の原点を訊ねて（1）～（2・完）」（『阪大法学』64巻5号、6号、2015年）、「イングランド初期印刷史における法文献印刷：『ブラクトン』印刷本出版とその影響の検討の前提として」（『阪大法学』66巻6号、2017年）、「いかに原告は被告の抗弁へ反論しうるか：法書『ブラクトン』の「抗弁論」における反抗弁（*replicatio*）への注目」（『法と政治』74巻1号、2023年）、『キーコンセプト法学史』（分担執筆、ミネルヴァ書房、2024年）など。

出雲 孝 (いずも たかし)

日本大学法学部教授。専門は近世自然法論。

担当：第3部第11講・第12講・第13講・第14講・第15講

業績：『*Die Gesetzgebungslehre im Bereich des Privatrechts bei Christian Thomasius*』(PeterLang Verlag, 2015)、『ボワソナードと近世自然法論における所有権論：所有者が二重売りをした場合に関するグロチウス、プーフェンドルフ、トマジウスおよびヴォルフの学説史』(国際書院、2016年)、『ストーリーから学ぶ民法ナビ』(共編著、みらい、2021年)、“Coarse ethics: how to ethically assess explainable artificial intelligence” (共著、AI and Ethics 2 (3), 2022)、「公平な観察者は公正価格を導き出せるか? : スミス『道徳感情論』と『国富論』第一編第七章の価格論との関連」(『思想』1195号、2023年)など。

鈴木 康文 (すずき やすふみ)

桃山学院大学法学部講師。専門は、近代ドイツ法制史・法思想史。

担当：第4部第16講・第17講・第18講・第19講・第20講

業績：「19世紀前半における判例についての覚書」(『修道法学』40巻2号、2018年)、『法思想史を読み解く 古典／現代からの接近』(共著、法律文化社、2020年)、「ヴィルヘルム・アルノルト (Wilhelm Arnold, 1826-1883) について」(『桃山法学』32号、2020年)、「ヘッセンの立法史」(『桃山法学』40号、2024年)など。